

Panayotis Nellas:

*Le vivant divinisé, L'anthropologie des Pères de l'Église*  
(traduit du grec par J.-L. Palierne)

Paris, 1989, pp. 249

大森正樹

キリスト教東方の、とりわけギリシア教父の人間学を知るための概説書としては既に全般的なものとして B. Zenkowsky, *Das Bild vom Menschen in der Ostkirche, Grundlagen der orthodoxen Anthropologie*, Stuttgart, 1951; B. Zenkowsky, H. Petzold, *Das Bild des Menschen im Lichte der orthodoxen Anthropologie*, Marburg an der Lahn, 1969. や P. Evdokimov, *L'orthodoxie*, Paris, 1959. などがあったが、本書は比較的最近のものの一つである。著者 Nellas はギリシア人で、教父文書の選集を出したことで知られている。従ってギリシア教父の人間学を著すに適した人であろうし、その著を繙けば、ギリシア教父の伝統が脈打つ現在のギリシアの知的関心状況をも窺うことができよう。

本書は四部から成っている。第一部は「神の像」としての人間と「皮の衣」を纏う人間に焦点を当て、第二部はカバシラスのキリスト中心的な人間学の研究に当てられ、第三部は宇宙的視野の下での人間学、それも特にクレタのアンドレアス作の大カノンを通して見ようとするもので、第四部はエイレナイオス、ナジアンソスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス、マクシモス、カバシラス、聖山のニコデモスの著作からの抜粋、それに東方教会用語の簡単な説明と第一部に関する詳細な註がついている。

第一部は更に三つに分れ、その第一では「神の像」を考察する。教父の提供するキリスト論、人間論、宇宙論などはすべてこの「像=エイコーン」をめぐる展開している。『創世記』第一章第 27 節の「神は御自分にかたどって人を創造された」の解釈に端を発する人間理解は旧約の世界から新約の世界へと至り、キリストは見えぬ神の像であるという認識の上に立つキリスト論が形成された。更にそこから人間はキリ

ストの像、つまり神の像の像であるという認識が生まれ、人間論の核心が成立し、パウロの「像の神学」(コロサイ一、15-18)により補強された。ところで人間が神の像であるという時、そこには人間が理性的な者、創り出す者、統治する者、自由を有する者、一切の被造物への責任を担う者という意味が見られるのであるが、これは又魂と身体をもつ人間の、創造の仲介者としての特殊な面をも併せもつことを意味している。つまりペルソナとしての人間は自然と関係をもち、宇宙と結びつき、自然的存在としての制限をもちながら、その限界をどこまでも突き破っていこうとする存在なのである。このような無限の可能性をもつ根拠は、人間が神にかたどって(カタ・エイコナ)造られたということのうちにある。換言すれば、人間の元型はキリストであるという確信がそこにある。

そのことは肉となった御言葉の神のうちなる位格的結合に、人間もまた招かれていくということの意味する。即ち神化の可能性が示されている。著者によれば、神化とは人間がキリスト化されることであり、キリストのうちに生きることなのである。

以上のような正の側面に対し、我々はまた『創世記』第三章第21節の「皮の衣」という負の側面にも注意しなければならない。人祖の墮落以来人間は皮の衣を纏うことになった。それは死すべき状態や非理性的特質を人間がもつことである。皮の衣は単なる人間の体を表現するものではなく、魂を伴った身体という人間の全体を表わしている。墮落以来人間は生物学的な法則に従うものとなった。しかしその状況は人間の本源的姿ではなく、付加されたものだ。と教父たちは考え、ニュッサのグレゴリオスによれば、皮の衣は「肉の傲慢さ」であるとも言われる。

ところで皮の衣の意味するところの一つは可死性ということであったが、そうなのは一つには罪による自然な結果であった。即ち「像」そのものが曇り、自然に従って崩壊への道をたどった。しかし他方で、それは一種の癒しでもあり、恵みでもあり、新しい可能性を開くものでもある。人間が罪を犯すことによって、人間のうちに解体が生じるが、それと同時に世界そのものも解体する。人間の所業が宇宙・世界の命運をも決定するのである。ここに東方神学の宇宙的な視点が見受けられる。

宇宙的視点をもった教会はこの世界をどう見るのか。教会は人間の犯した罪の根源をその自己中心的な自律の精神、自己のみで充足しようとし、神を必要としなくなった人間の傲岸さに見る。世界は人間のこの不遜さに彩られているのだ。しかし絶望することはない。たとえ非理性的な自然の力ではあっても、それを賜物、恵みとして受

け取り、善用することはできる。聖人たちは現にあるがままの状態を喜びをもって受け入れたのであり、そのような愛をもってこの世界の色を塗りかえることはできる。教父たちは彼らの時代の人間のなした様々の所業を、ひたすらなる祈りの実践と修徳、そして聖体祭儀の執行と参与によって救ったのだと著者は言う。

神の像と皮の衣をこのように概観した後、第二部では、カバシラスが取り上げられる。カバシラスは「キリストにおける」人間の霊的生活というキリスト論的で教会論的な構造を解明した。即ち、キリスト論的人間学を構築したところに彼の功績を著者は見ている。墮落以前、人間は位格的結合を受け入れることができ、この結合の中に人間の真の存在と霊的生活の充溢を見出していたのであった。ところが人祖の罪によって神的本性との間に無限の距離が出来てしまい、これが悲劇的现实を招来した。この点に人間が気づいてそこからの脱却をはかろうとしても、キリストなしには不可能であった。キリストのみが人間本性の諸問題や罪と死を克服したからである。まさしく人となった御言葉によって、新しい存在論が開陳されたのである。人間はこのキリストに交わりつつ、キリストの体なる教会に依りつつ、人生の旅路を歩むのである。それは人間が神を識り、自分の意志を神のそれに添わせていくことに他ならない。人間は「キリストのうちなる人間」であるとき、その本領を発揮し、「キリストのうちなる生活」を営むとき、霊的生活をその全き形において成就する。かくして人間の生物学的存在の地平がキリストの死と復活に与る洗礼によって浄化され、更に聖体に与ることによって自分自身のみならず、宇宙をも変容し、遂には歴史の変容がはかられる。このとき人間の諸能力も十全な仕方であら動し、展開する。人はキリスト化（＝神化）し、浄められる。かくてキリストと一致した知性は神を見、神のうちに憩うことができる。カバシラスはここから更にヘジュカスムの理論的解明も行っている。

世界の変容とは次のようなことである。罪に支配された世界にキリスト自身が飛び込み、そこに聖霊のエネルゲイアが働いて、世界の有り様を変化させる。人は人で教会の様々な秘蹟に与ることによって、神の生命が被造界に浸入し、罪の闇を追い払い、聖化する。

第三部は四句節の典礼に用いられる大カノン（クレタのアンドレアス作）を中心に展開する。カノンは讃歌であって、聖書から題材が採られている。アンドレアスのカノンでは聖書に基く人間の歴史が語られており、人間の悲劇的狀況を信徒に告げる。東方教会では教会堂の建物そのもの、イコンそしてこの聖歌などが世界の現実を表現

するものと考えられており、この環境の中で信徒の靈的視野が鍛えられるのである。

このカノンでは人間の墮罪以前と以後の状況を示す。つまり自然の秩序が転覆してしまい、爾來人間は物質の友となり、飽くなき所有欲の塊りとなったことを詳さに語る。これを教会で聞く信徒は人間がこのような偶像に迷わされている状況を嘆き、深く痛悔の心を起こす。それゆえ一層失ってしまった神との交わりを取り戻したいと切望する。それが実現するためにはまず第一に己が置かれた状況を知ること、自分が何であるかを認識すること（自己知）、次いで神へと向き直り、神を信頼しつつ修徳に励むこと、第三に知性そのものを鍛え直すことが必要である。即ち知性の苦しい鍛練を経て意志を完全に神へ向けることによって、不受動心（アパテイア）を獲得するのである。

第四部は6人の教父の著作からの抜粋である。エイレナイオスの断片からは人間が神の像として造られたこと、神学者グレゴリオスからはその人間論、ニュッサのグレゴリオスからは皮の衣について、マクシモスからは人間論についての擬ディオニュシオスと神学者グレゴリオスの提示する諸問題について、カバシラスからは人間の元型であるキリストへと向かう神化について、聖山のニコデモスからは御言葉が人となったことに関し、彼の著した『靈の斗い』への誤解に対する弁明が引用されている。

以上のような内容をもつ本書のねらいは、教父の人間論の核心を「神化」として説くことにあるが、それは教父のテキストの単なる再現を意図するのではなく、むしろ教父の言葉を現代のコンテキストの中で生かそうとするものである。そのため最も多く頁が割かれている第一部においては、ジェンダーの問題、結婚の問題等現代的な視点が導入されており、その点で今日的意義があると考えられる。またカノンという讃歌の占める東方教会での位置を強調するあたり、人間の根本実相への迫り方が決して学知にのみ終始しない東方的性格をよく現わしている。人間のドラマの中に神学・哲学的知見を求めていくところに、著者の人間観の広さを我々は見てとることができよう。また第一部の詳細な註は教父の人間学への道しるべとして大変有用である。

---